

相手を考える意識と気持ち

社会福祉学部社会福祉学科 2年 林崎 拓也

活動：NPO 法人 共育ネットはんだ

クラス：野尻 紀恵 先生

① 自分の成長と気づき(実習を通して)

私は半田市の NPO 法人共育ネットはんだで実習を行った。障がいを持った子ども達と様々な活動を通して学び合うのが趣旨の NPO である。私は実習全体の前半、子ども達と友達のような関係になれることを無意識に目標にしてしまっていた。しかし本来の目的は子ども達と友達になることではないことに気づき、それを意識しながら後半の実習を行った。もちろん最初の信頼関係の形成の段階では友達を目標にするのもかまわないかもしれない。しかし、ある程度の関わりを持ち上手く関われるようになった段階でその意識は捨てなければならない。実習先の方もおっしゃっていたが、大切なのは「私達は友達としてあるのではなくあくまで`支援者`であり、それを忘れないこと」。ただ友達のように仲良くなるうとして相手を見るのと、この人は今何をしたいんだろう、どうして欲しいんだろう、何を求めているのだろうという`相手の求めているもの`を意識して見るのではまったく違うものが見えてくる。見た目には同じことでも相手の意図する本当のものが感じ取れる。友達になるという目的がダメなのではなく、友達なのか支援者なのかという意識をどちらかにハッキリと固定することが大切である。また、何を望んでいるか、だけでなく、何をしてあげるべきか、どうしてあげるのがその人にとって一番良いのか考えて行動するのも支援者の立場であるなら必要かもしれない。要は、私達はこの実習で子ども達の求めること、子ども達に必要なことを考えながら行動することが必要だった。

上記のようなことを実習の終盤、終了後に考えた。そこで、上記のような内容に当てはまる、実習の中での印象深い出来事をいくつかあげてそれをもとに考える。

共育ネットはんだの農園体験「共育ファーム」での活動中の出来事。小さな女の子が畑の土を耕す作業を体験していた時のこと。確かに小さな女の子には少し大きな鍬だったし、少し危なっかしかった。危なっかしいがその小さな女の子は一生懸命鍬を振っていた。それを見ていたお父さんは女の子の後ろから鍬を持って、振り始めた。それを見た実習先の方が、「自分でやらせてみてあげてください」と声をかけた。女の子は自分の力で鍬を振って土を耕すことをやってみたかったと私は感じた。確かに最初は使い方を知ること、危ないことを考えると手助けをしてあげる必要がある。しかし途中からは自分の力にまかせてあげるのが良いのではないだろうか。自分の力で何かを成し遂げることの意味はとても大きい。あの時、女の子が`自分でやってみたい`と思ったであろう気持ちを私達は感じ取ってあげることが必要であった。それを感じ取って、その気持ちを一番に尊重した手助けが私たちのすべきことであったと考える。「危ないからというこちらの気持ちだけでなく、

女の子の気持ちを感じ取ることの大切さ」これを私は実習で非常に強く感じ、学んだ。

もう一つ。これは私たちが実習に行って一番最初の頃に言われたことだ。「相手の機嫌を見てるだけじゃなく、言わなきゃいけないことはちゃんとということ。間違っていることは間違っているときちんと教えてあげること。それは相手のためになることだから」。これも実習をする中でとても印象に残った言葉だ。自分が担当した女の子がその場からなぜか動いてくれなくなり、自分は理由も分からず言葉も出てこず何もできずに立ち尽くしてしまった。もう一人の担当の方が上手く実践するのを見ていることしかできなかった。それ以降、ダメなことにはダメと言ったり、これやるよとしっかり言えるようになった。言えば子ども達はきちんとそれを聞いて、いろんな形で応えてくれた。無言で立ち尽くしているだけでは信頼関係なんて到底気付けない。当たり前なことだが改めてその意味を体感し強く感じた。相手の気持ちと相手のためであることの両方の大切さを感じた実習だった。

②私達は実習後のグループ研究で「NPOの持つ`つながり`や`かかわり`～ニーズとウォンツとミッション～」というテーマで研究を行った。ここでは研究内容そのものではなく、研究内容を実習と関連付けて考える。

畑の女の子の場合、まだ小さく、自分の考えや意見を上手く表すことができない。私達はその女の子の「自分でやってみたい」というウォンツまで入り込んで引き出してあげられる存在であるべきである。子ども達はウォンツを持ったあとニーズの領域まで持って行って表現することがとても難しい。上手く表せない分、こうしたいなと漠然と思った時点でそれは子どもたちにとってはニーズの領域に入っているのかもしれない。小さな子ども達にとってはウォンツとニーズは大人に比べて非常に近い領域にあるのではないかと考える。しかし自分の考えを自分の力で表現することは必要なことである。これは私たちが接するときに、ただ相手のウォンツを全て無理やり引き出してしまうのではなく、自分の考えを自分で表現できるように少し時間を取ってあげて自分でゆっくりでも話させてみたり、表現する力を付けてあげるべきだと考える。先ほどの言葉をもっと丁寧に言うならば、引き出すのではなく、引き出し方とその表現の仕方を教えてあげること、が大切なのではないだろうか。畑の女の子には、「私はこれを自分でやってみたい」などの女の子の気持ちを表現させてあげることが大切であったと考える。

実習先の方の「相手の機嫌を見てるだけじゃなく、言わなきゃいけないことはちゃんとということ。間違っていることは間違っているときちんと教えてあげること。それは相手のためになることだから」という言葉。今回の実習では、「相手の気持ち」と「相手のためであること」の両方の大切さを感じると同時に、その両方が共存することの難しさも感じた。ニーズやウォンツ、人の気持ちというのは見る場所や角度によって変わり、必ずしも正解があるものではない。人はそれぞれの違う価値観、望みを持っている。先程述べた畑の女の子も、先程は例として自分で一人でやってみたいということをあげたが、本当はそうではないかもしれない。実はやってみたいかもしれない。しかしやることの成長は本人のために必要なことだ。やはり正解はない。

大切なのは自分の価値観ではなく、色々な角度からそれを見れること。相手のウォンツを考えようとする気持ち、相手のために何が必要か考える気持ち。その気持ちを持つことが一番大切であると今回の実習と研究を通して私は学び考えた。